

# ハムレットの見なかったもの

北川重男

『ハムレット』という作品は主人公をめぐる人物、とりわけ母である妃と恋人オフィーリアとの関係がつねに注目をあびてきた。その際の解釈の傾向はほとんどの場合、当然のことながら主人公ハムレットの独白を中心にして組み立てられている。しかし同時にイングランドへ追放されるまでのハムレットのせりふには、ハムレット特有の問題が示されており、そのそれぞれが必ずしも一貫性をおびているとはいいがたく、そこからさまざまな憶測や解釈が生まれてくるのである。それらの諸問題のなかでもひととき印象的なのが母の妃に対するハムレットの思いこみと過剰な反応であろう。フロイトやその後の一派が主張した深層心理学的解釈が今世紀のこの点に関する決定的な影響を与えたのは否定しようもない。

しかし『ハムレット』という作品はわれわれの想像以上に多様な視点から描かれている作品でもある。それらをハムレットの視点に重点をおくあまり無視したのでは、見えるものが見えなくなる恐れがあるのである。そのもっとも顕著なものが、いわゆる彼の母妃の再婚に対する不倫説であろう。この点に関してはすでに論じているので、その論文を参照していただきたいのであるが、彼は何カ所かの機会をとらえて母の再婚がカトリックの教会法にてらして違法であり、不倫を犯したことになる<sup>1)</sup>。それはクライマックスでの母の居室での息詰まるような対決のときにも、一貫した主張となって語られている。また、その直後の最後の独白でも、

…ところがこのぼくはどうか、  
父上を殺害され、母上を陵辱され  
理性も、感情も煮えたぎっているというのに、

何も手つかずだ。…

(4幕4場56—9行)<sup>2)</sup>

… How stand I then,  
That have a father killed, a mother stained,  
Excitements of my reason and my blood,  
And let all sleep, …

というように、最初復讐を躊躇していたときは亡霊の語る事実にたいして懐疑的であったのに、それが嘘のように断定的に父の死の原因と母の不倫を事実であるとして語っているのである。

ハムレットの父と母との問題へのアプローチには、大きな違いが見られる。父の殺害と復讐に関しては、信じる部分と疑いとが二分しており、それは当時の亡霊に対する常識からいってもごく普通の態度であったことは、ドーヴァ・ウィルソンの指摘を待つまでもない。問題はハムレットが亡霊を疑っていたということだけではない。ハムレットと亡霊とのやりとりには、見過ごすことのできない点が観測されるのである。それは亡霊が驚くほどハムレットの本質を見抜いているということであって、もしハムレットが亡霊に出会った衝撃をさまし、冷静にこれを考えてみたらば、その重大さに気づいたことだろう。その事実だけでも、ハムレットは亡霊のいうことの真実を覚り、劇中劇のような愚かな挑発をしないでも、確信を維持できたと思われる。それは亡霊との最初の出会いのときに、ハムレットにたいして、亡霊が一つの危惧を示しているときに表れる、

だがこの復讐をどのように行うにしても、  
おまえの心を汚すなよ。また母にたいしても  
傷つけるようなことをたくらんではならない。

(1幕5場84—6行)

But howsoever thou pursues this act  
Taint not thy mind, nor let thy soul contrive  
Against thy mother aught.

この「心を汚すな」というのは倫理的な意味なのか、あるいはメンタルな意味なのか迷うところであるが、後の王妃との場面でハムレットが肝心の復讐をはるかに逸脱して、ひたすら王との寝床での母の汚らわしい性的悦楽を空想し、それこそ亡霊の憂えていた通りに展開したとき、ま

た亡霊が最後にそのことを戒めるためだけに、出現したことを思うとき、これはまさにハムレットの性癖を知りつくしていた者のみの危惧であったと知るのである。

ハムレットがこのように父や母の思惑をまったく考慮しない行動や思考を示すという傾向は枚挙にいとまがないほどだ。一例をあげれば、亡霊が復讐を命じたとき、なぜか彼は亡霊の去った後で、このようにいう、

そうだ、ぼくの記憶手帳からすべてを抹殺してやる、  
あらゆるくだらない覚え書きの類を、  
若いときから観察して書き留めておいた  
格言や、気の利いた文句や、印象的な文言などみんなだ…

(1幕5場98—101行)

Yea, from the table of my memory  
I'll wipe away all trivial fond records,  
All saws of books, all forms, all pressures past  
That youth and observation copied there, . . .

これを見ると、ハムレットはある種のメモ魔であつたらしい。彼とポロニアスとのやりとりにも彼の気の利いたせりふがひんばんに出てくる。長年の習慣をうかがい知ることができる。だからここではそのような過去のすべてを捨てさらねば、復讐は不可能であると決意を述べていることになる。ところが、まったく皮肉にも、そのせりふの直後に、彼は次のようにいっている、

ああ、悪党め、悪党め、にんまりとしながら実は極悪人なんだな。  
そうだ手帳だ——書き留めといたほうがいい。  
にんまり、にんまり、としながら悪党になれるとな。  
すくなくとも、このデンマークじゃそうなんだ。

(1幕5場106—9行)

O villain, villain, smiling damnèd villain!  
My tables - meet it is I set it down  
That one may smile, and smile, and be a villain;  
At least I'm sure it may be so in Denmark.

ハムレットはこのような重大な局面でも、自己の思考に拘泥しているのである。亡霊の意図はここでは少しも省みられていないように思われ

る。それどころかいくらかは亡霊にたいして皮肉な、あるいはからかい気味な態度を見せている。

実はハムレットのこのような性癖は作品の中で一貫して描かれているものである。彼は自らの問題に極度に集中しているあまり、父や母のようなもっとも愛している存在にたいしても、相手の意図や愛情や思惑などを考えてみようとは思わない一面が見られるのである。彼の思考のなかで特に顕著なのは、この作品ではたった二人しか登場しない女性に対する態度の特異さであり、考え方である。この点を見逃すと、彼の愛情の深さと、それに拮抗する自我への執着という図式が見えてこなくなる。なぜそのことが重要であるかといえば、彼の意図を二人の女性は完全にとらえることができなかつたばかりか、彼の愛のサインをも見逃してしまうことになるからだ。すべての根元が母の再婚にあることは間違いのない事実だが、それは愛する存在をクローディアス王に奪われたとか、母への潜在的な欲望だとかという説だけでは明確にならないものである。ハムレットは母が一人の女性であり、正当な性的欲望を持ち、同時に子を愛している母でもあるというシェイクスピア独特の重層的な人物であることを決して認めない。彼は母にどうしてほしかったのがを明確に示してはいない。亡くなった父を母がひたすら恋慕って、操をたてていればよかったのか。彼は母を責めるときにはそのようなことを匂わせるが、それはまったく母の考えや生き方を無視したものである。

それは、オフィーリアに対する態度にも顕著に現れていることを忘れることはできない。二人の女性にたいするハムレットの考えはもちろん違うが、それでも態度において共通のものがある。ハムレットは一方的にオフィーリアに向かって自己の情報や感情を発信しているが、それを彼女が理解していないことにいらだって、激しい感情を彼女にぶつけるのである。何も真の事情を知らない者が、しかも人生をそれほど経験しているとはいえない乙女が、彼のいまおかれている苦境を了解し、彼がカーテンの陰に隠れている者たちを意識しながら、自分にたいしてある種の重要な情報を伝えようとしているのだというようなことが、どうして彼女に理解しえるであろうか。彼女の無理解が彼の女性不信を助長しているなどと理解できるであろうか。しかもオフィーリアも多くの抱えきれない問題を目の前にして必死な気持ちで彼の前へ登場したのだ。そうでなければ、恋人のスパイをするなどということができないわけがな

い。無邪気な思いつきで彼の前にこのこと出てきたわけではないのである。そのくらいのことわからないハムレットではなからう。しかし事実はわからなかった。それはハムレット自身に問題があったとしか思えない。ハムレットとは違った問題を彼女も抱えているということ、彼は認めようとしなかったのだ。これがよく言われるように直ちに「弱き者よ、その名は女」という女性不信のせりふと直接結びつくかどうかは検討を要するが、かりにハムレットがこの時点で女性不信におちいついて、しかもそれが母に対する感情からでて、女性全体に波及し、ついにはオフィーリアのスパイ行為にまで及んでいるのだというようなことを彼女が理解したとしたら、化け物だ。ハムレットがオフィーリアを愛していることは疑いないが、彼は女性がいま何を考え、どう行動してきたかを理解しようとしてはいない。そこに母への独断的な行動との共通性を認めるのである。

そういう意味で、二人の女性が何を考え、どういう行動をとっているかを、ハムレットの思惑の外で理解することの重要性を指摘したいのである。A. C. ブラッドリー以来のかなりの批評がハムレット中心のものであり、ハムレットの目を通してしか二人の女性たちを解釈してこなかったことの問題点があることを見出すに違いない<sup>3)</sup>。もちろん、シェイクスピア作品の中での女性のせりふは少なく、特にこの作品での二人の女性のせりふはけっして多くはない。それにもかかわらず、その少ないせりふからもこれらの女性たちがシェイクスピアの喜劇の女性たちと同じような感情と、主体的な意志とをもって行動していることがわかる。しかも驚くべきことには、ハムレットがそのことに少しも言及せず、考慮も払っていないことである。あのポローニウスを相手にするときのハムレットの無礼な態度を観客はどう思っているのだろうかと常々疑問に思うのであるが、あのハムレットの皮肉な、完全に相手の人格を無視した態度は、ポローニウスの場合極端に誇張されているが、他の人物にたいしても、彼は完全に自己の思いこみの世界にひたりこんでいる<sup>4)</sup>。シェイクスピアはそれをさりげなく描いている。ホレイショウに向かって臨終のハムレットは彼の殉死をとどめ、生きながらえて後世にこの事件の顛末をよく伝えてほしいという。ホレイショウは了解する。しかしはたして彼はハムレットが望んだような行動に出たであろうか。ハムレットはホレイショウの完全に中立的な生き方をよく見ていたとは思えな

い。ホレイショウはあのような宮廷の困難な状況下でも、誰からも危害を加えられていない。王すらもホレイショウの存在を許しているのである。ハムレットの死後、フォーティンプラスの前でホレイショウはこの顛末を冷静にごく簡単に要約してみせる。ハムレットの劇的な生き方とホレイショウの対処の仕方には距離がある。ここにもハムレットの知らないホレイショウの一面が表現されている。

このような観点からオフィーリアを見てみると、興味深いことがわかる。彼女が最初に登場するのは、1幕の3場であるが、これは亡霊の出現と、宮廷での緊迫した場面の後にくる。1場、2場の後では、ポローニウス家の三人のやりとりはまことにおだやかなものにうつる。レイアーティーズはどこからハムレットとオフィーリアのニュースを仕入れてきたのかはわからないが、二人の仲が相当進んでおり、しかも妹が乙女つつしみをいくらか犠牲にしてまでハムレットの愛を喜んでいるらしいと確信している。だから彼は自分の女性観とひき比べても心配である。兄としての情があふれた忠告をしている。たとえハムレットの愛がどのように真剣なものであろうとも、彼の身体は彼一人のものではないというレイアーティーズの考えは、常識的なものであるが、そこには兄としての情愛と真実が見てとれる。また、妹に向かって兄としての権威を認識させてもいる、

どのような貞節も誹謗の一撃を逃れられない。

(1幕3場38行)

Virtue itself scapes not calumnious strokes.

このせりふはドーヴァ・ウィルスンのいうように、彼が父の普段の格言的な言い回しを模倣したものと見ることもできようが、ハムレットが例の尼寺の場でオフィーリアにいう、

…たとえきみが氷のような貞節、雪のような清らかさをもつていようと、

誹謗から絶対に逃れられないぞ。

(3幕1場132—3行)

... be thou as chaste as ice, as pure as snow, thou shalt not escape calumny;

と、まことに奇妙な一致をみせる。二人の若い男性の女性観の一致が見事に表現されているのである。

兄の忠告をオフィーリアは軽く受ける、  
そのご忠告を大切にしまって、  
わたくしの心の用心棒にしておいてよ。

(1幕3場45—6行)

I shall th'effect of this good lesson keep  
As watchman to my heart.

このせりふは彼女が深刻に兄の忠告を受けとめているのではなく、兄妹で軽くウィットのやりとりをしている感じである<sup>5)</sup>。それが彼女のレトリカルな表現にも表れているし、そのせりふの直後の彼女の反撃のやりとりにもその調子は見取れる、

…でも、お兄さま、  
罰あたりなお坊さまがおやりになるみたいに、  
わたくしに向かつては天国への厳しい、茨の道を教えながら、  
ご自分は、傲慢で、気ままに放蕩しほうだい、  
色恋の桜草の咲き匂う道へと踏み込んで、  
ご自分のおっしゃった教訓を忘れてしまうなんていうことのないよ  
うにね。

(46—51行)

... But good my brother,  
Do not as some ungracious pastors do,  
Show me the steep and thorny way to heaven,  
Whiles like a puffed and reckless libertine  
Himself the primrose path of dalliance treads,  
And recks not his own rede.

このせりふももちろんオフィーリアの独創ではなく、〈茨の道〉と〈桜草の道〉の選択は当時の道徳的な教えのなかでよく引き合いにだされたもので、その受け売りである。だから、ここでは兄弟で一種の言葉遊びをやっているのである。

こうした最初のオフィーリアのやりとりからわかる彼女の態度は、あからさまに自己の本心を出さないということである。たとえ最愛の兄であろうと、彼女は本心を明らかにせず、言葉遊びやレトリックで自己の思いを隠している。兄の厳しい指摘も軽くなして、それを深めようとはしていない。このような特色は、この兄との別れのシーンの直後にも

またくりかえされる。父ポローニウスによる説教とハムレットとの交際を禁止される場面でも、はっきりと認められる。父の情報は明らかにこの人が好むスパイ行為によって得たものであることを示している。ポローニウスはこの行為の無反省なくくりかえしによって成功もしたが、同時にハムレットによって殺害されることにもなる。その彼のスパイの報告でも、レイアーティーズが得たと同じ結果が報告されていた。それは余りにも無謀などと思われるオフィーリアの行為である。彼女は正々堂々とハムレットとの交際を受け入れていたばかりか、ハムレットが彼女の私室に現れることすら許容していたらしい。このことを指摘されても、彼女は別にわるびれることもなく、最近ハムレットがとてもやさしい心遣いを示してくれている。それを自分にたいする好意であると受けとめていると父にいうのである。あきれた父は彼女に、

おまえはその愛の心遣いとやらを信じているのか？

(1幕3場103行)

Do you believe his tenders as you call them?

彼女がわるびれずにいったこの“tenders”には、よほど彼も気を悪くしたらしく、ポローニウスはこの後で、しばらくこの語をころがして言葉遊びをしてみせる。オフィーリアはこのような行為にも、別に反論しはしない、

どう受けとめていいかわかりません。

(104行)

I do not know my lord what I should think.

といっている。こうとしかいいようのないようにも受けとめられるが、そうではなく、彼女は巧妙に自己主張を隠したのである。この後はポローニウス得意の説教がつづく。そして彼女はハムレットとの交際を禁じられてしまうが、そのときでも、彼女はただ、

おっしゃる通りにいたします。

(136行)

I shall obey, my lord.

というだけだ。この父とのやりとりの特徴は、彼女がはっきりとハムレットの愛を信じていることを暗示していることと、それについてポローニウスが反対すると、あえてさからわないということである。彼女が父のいいなりになって、ハムレットとの交際を絶ったからといって、その



ことをもってオフィーリアが自己意志を欠如した女性であるというのは、即断のそしりをまぬがれない。シェイクスピアの女性はしばしばこのような一時的な従順を示すが、それはすべてを運命にまかすというのではなく、次の機会がめぐってくるまで一時的に仮の妥協をただけで、自己の意志を無制限にねじまげて、あきらめるというようなことはしていない。これは今後の彼女の行動を理解する上でのヒントになる。ジュリエットのようなひたむきで、直線的な行動を彼女はとっていないし、そうしたところで、デンマークの情況はそれを許さない。彼女に見られる女性像は、むしろジュリエットとデズデモーナとの中間にある。喜劇では、『ヴェローナの二紳士』のジュリアとか、『終わりよければすべてよし』のヘレナに類縁の態度であろうかと思う。

オフィーリアは楽天的であると同時に、運命に逆らおうとはしない。じっと幸運のおもむくところを期待を胸に秘めながら待っている。その彼女を予想外の事件が襲った。これは最初の良くない兆候であった。ハムレットがだらしのない格好で、見たところ狂ったとしか思えない姿で現れたのである。彼女の未来像がもろくも崩れてゆく予兆となる。それは父への報告に表現されている。パリに行かせた息子の行状をさぐるべく、また例のごとく使者をたてて、ポーニアスが得意の人生哲学を述べていると、驚愕のオフィーリアが登場する、

お父さま、お父さま、とてもびっくりしてしまっ！

(2幕1場73行)

O my lord, my lord, I have been so affrighted!

それから彼女は尋常でないハムレットの出現の様を語る。父が、

おまえが恋しくておかしくなったか？

(83行)

Mad for thy love?

という問いには、

…お父さま、それはわかりませんが、

ほんとうに気がかりでなりません。

(83—4行)

… My lord, I do not know,

But truly I do fear it.

といっている。いかに彼女のショックが大きかったか。しかし、このと

きですら、彼女は相変わらず本心をはっきりと言おうとはしない。「わかりません」というせりふは、すでに彼女の口癖になってしまっているみたいだが、そうではない。実は彼女ほど現実の厳しさをよく承知している者はいないのである。だから、このようなときでも、けっして自己の意見を述べようとはしていない。

こうした彼女の言行を、世間知らずだとか、単純で、無心だとかと断定したのではこの作品における彼女の演ずる重要な役割を無視したことになってしまうだろう。ブラッドリー以来の解釈では、そういう程度にしか作品中のオフィーリアの役割を認めようとしないう傾向がみられる<sup>6)</sup>。それは20世紀前半でのおおかたの傾向が、悲劇的なジャンルを重視し、喜劇作品における女性の占める位置と同等な視点を悲劇にも向けることをためらったことに原因を見いだせる。喜劇の女性たちの重要性を悲劇の女性たちと同等の視点でとらえるようになって初めて、ハムレットと女性たちとの真の関係が読みとれる可能性が開けてきた。ハムレット的な視野を中心にすえた悲劇作品という観念を捨てて、たとえ悲劇であろうとも、女性たちはその中の重要な役割を与えられているのである。そこに女性に対する解釈の変更の余地が生じる。オフィーリアには、彼女特有のアクションが用意されている。問題はそれが主人公ハムレットとどのような関連をもたらされているかである。彼女の「わかりません」とくりかえされるせりふを無邪気とか、世間知らずとか考えず、オフィーリアのストーリーで考える。すると彼女がどのような意味をハムレットとの関連でもたされているかが明瞭になってくる。

ハムレットが亡霊と出会ってから、オフィーリアは彼との交際をことわり、その後どのくらいの時間がたったかという点に関しては、さまざまな説が主張されているが、この2幕の最初の場面でのハムレットとオフィーリアの直接の会話は、厳密な意味で、最後の二人だけの時間であった。後は尼寺の場にしても、劇中劇の場にしても、複雑な人間の集団の中でしか二人の会話は描かれていない。従って、常識的にはこの場面はハムレットが何かの重要なメッセージを告げに現れたと見るべきであろう。ところが、それほど重要な行動が直接描かれていないで、オフィーリアの伝聞というかたちで伝えられている。そのことのもつ劇的な意味を解明しなければならないだろう。なぜ二人だけの行動を描かなかったのか。なぜ伝聞なのか。ハムレットは何を彼女に伝えようとしたの

か。彼女の報告だけを見ると、ハムレットは別れを告げに来たようにもみえる。また、付随的には、世間のうわさどおりに気がふれたことを彼女にも目の当たり見せようとしたようにもみえる。しかしそのような理由だけなら、このような芝居じみた行動にでるのは、むしろハムレットにとってマイナスであろう。オフィーリアのほうから絶縁をしてきたのだから、そのままにしておけば一件落着だったはずだ。それ以外にも現れた理由はいろいろ考えられる。しかしどの理由も矛盾なしには終わらない。ハムレットがまだ未練を彼女にのこしていたから、いま一度現れたとか、彼自身で最後の別れにきたとかである。ハムレットがオフィーリアを愛していたことは間違いないが、それはハムレット特有の、他者には理解されないような部類のものであった。

ハムレットの愛は、ロミオにみられるような直線的なものではない。積極的に自分の恋人との状況を利用してみせることのできるようなものである。彼の恋文は、オフィーリアの父への報告の際には言及されていない。観客はポローニウスが王夫妻に報告するときに初めてその事実を知る。オフィーリアへの現れ方といい、恋文のレトリカルで、アイロニカルな調子といい、これが真剣に女性を愛している人間のすることかと疑わしくなる。それこそがハムレットの特質なのである。ある意味ではハムレットはポローニウスにたいして痛烈なしっぺ返しをしている。なぜなら、ポローニウスはハムレットのオフィーリアへの愛を一蹴したからである。その誠意を疑ったからである。ハムレットの恋文の文体は明らかにポローニウスが食いついてきそうな餌をまいてある。事実ポローニウスは得意げに王夫妻の前でハムレットの恋文をこきおろして、得意になる。ハムレットの恋文と、ポローニウスのレトリックはハムレットの思惑どおりに波長のあったものになる。そうしてみると、ハムレットがオフィーリアの前に現れたのは、前述のようなさまざまな理由が第一の目的ではなかったことになる。彼はオフィーリアを愛しながら、またオフィーリアを軽蔑に近い感情で利用している。

ハムレットの恋文はいろいろの興味深い事実を提供する。この手紙はいつ書かれ、それがいつポローニウスの手にとったのか。この手紙のレトリックがなぜ喜劇のある種の人物、たとえばペーローリーズとか、ドン・アーマードウバりの調子なのか。この手紙の内容がどの程度の事実を伝えているのか。たとえば、オフィーリアがこの文面を見て、満足

したのかどうか。もし満足したのなら、いっそう不可解なことになる。たしかにハムレットはある種の愛の信号をこの手紙のなかにひそませていると見ることもできる。しかしそれを打ち消すように、アイロニーをたっぷりときかせた文面が、オフィーリアの目にふれるだけではなく、それが必ず父を経由して王のもとに、あるいは母のもとに行き着くの見通していたことをうかがわせる。これ以前にオフィーリアが受け取った手紙もこのような文体だったのか。それなら、これはそれほど特殊ではなく、オフィーリアもいつもの調子で、読んだであろう。しかし違っていたなら、そこに異常な状況を彼女は嗅ぎとったにちがいない。ところが肝心の彼女はそういうことに対する言及をせず、ひたすらハムレットの恐ろしかった姿にショックを受けている。

この手紙と恋の顛末の報告は、それ以外にも興味深いことを示している。それはポローニウスが二人の関係をおそらくスパイによって報告されていたということを言及している点である。ある期間彼は二人の関係を黙認していたことになる。レイアーティーズの忠告を聞いてから彼はオフィーリアに命令を発している。オフィーリアが打ち明けるずっと前から彼は知っていた。このポローニアスの報告にはいささかの嘘がまじっている。王が、

…どのように娘御は  
彼の求愛を受けたのだ。

(2幕2場126—7行)

... But how hath she

Received his love?

と問うと、ポローニウスはこう答えている、

実をもうしますと、このわたくしめは気づいていたのです。

その後から娘が話してくれたというわけです。

(130—1行)

As I perceived it, I must tell you that,

Before my daughter told me—

この直後に彼は王にたいしてすぐに二人の交際を禁じたようにいっているが、実際はそうではなかった。これらのやりとりを聞いていると、オフィーリアの出番はないように感じられてくるだろう。ここには自己を押しえてひたすら事態の好転を待っている姿がうかんでくる。事実、こ

の次の尼寺の場次第ではうまく運ぶようにも彼女にはみえたであろう。

ハムレットがオフィーリアを利用しただけでなく、父も彼女を徹底的に利用している。ポローニウスはまたも得意のスパイによって、真相をつきとめてみせると王にいうのである、

状況次第では、かくれた真実を  
見つけだしてみせます。たとえそれが  
地球の中心にかくれていまいしょうとも。

(155—7行)

If circumstances lead me, I will find  
Where truth is hid, though it were hid indeed  
Within the centre.

これをみれば、ポローニウスが心のうちでまたまたスパイをしようとしていることは明らかである。この直後のハムレットとポローニウスとのやりとりは、妙に波長のあったものであり、結果的にはハムレットの方が一枚上手をいったようにもみえるが、このようなゲームは危険なものである。ハムレット自身もこのことに想像が及んでいない。彼の潔癖さがこのような波長のやりとりを可能にしているばかりでなく、近い将来、オフィーリアを不幸にし、思わぬ復讐のまわり道をするきっかけを与えてしまうのである。

尼寺の場はいうまでもなく、これらの結果の最大の劇的な情況を映し出す。この場の分析はすでに他の論文において行ったので、詳しくは述べないが、まず注目されるのは挨拶の後でオフィーリアがありったけの知恵をしぼって発した最初のせりふである。

ハムレットさま、このあなたさまからいただきましたもの、  
ずっと、ずっとお返ししたいと思っておりました。  
さ、どうかお受け取りになってください。

(3幕1場93—5行)

My lord, I have remembrances of yours  
That I have longed long to re-deliver.  
I pray you now receive them.

これほど実は欺瞞的な言葉もない。最初交際をこたわったのは、オフィーリア自身であり、そのことは何よりも彼女が知っていたはずだ。それでもあえてそういったのには、それなりの理由がある。父からそういう

ように指示されたことも否定できないが、それはとらない。確かにポロニアスはよく、シェイクスピアの喜劇などの人物のやるように、自らが演出家になって、指示をしている。この場の演技をふりつけたのもポロニアスである。しかし、オフィーリアはこの機会を逃さなかった。彼女にとって、〈事件〉以後、初めてめぐってきた直接にハムレットと会話を交わすことのできるチャンスだったのである。そのときのために、彼女はあらかじめ一番大切なもの、それは指輪だったのか、あるいはペンダントだったのかはわからないが、しまっておいた。まずハムレットの反応を必死の思いで見てもたかったのだ。ガートルードが、

…あなたの美德の力で、  
あの子がもとのようになつたらと願っています。

(3幕1場40—1行)

... So shall I hope your virtues

Will bring him to his wonted way again,

というとき、オフィーリアはいつもの調子で、そうなることを願っていますと知っている。このコンテキストからいっても、ここは彼女が必死の思いで、勝負にでたのであると思われる。

ところが、この美德をハムレットは逆手にとってくる。彼も彼女の力を知っているのだ。だからこそ、ハムレットも必死の謎かけで彼女にせまるのである。ここで否定に名を借りながら、贈り物を突き返す行為が、実は新たに(敵を前にして)贈り物を改めて捧げる行為であることを、すでに論証したことがある<sup>7)</sup>。そのようなやりかたは、シェイクスピアの得意の劇的な手法である。しかしさすがのオフィーリアもそれを理解できなかった。この混乱に、いっそうのショックが加わってくる。「おまえは貞淑か」とか、「美しいか」とかいわれても、彼女にはそれは遠い世界のことである。兄のレイアーティーズとはあれほど闊達に冗談をいいあったのに、ハムレットのこのするどい謎には、追従できない。その延長上に有名な〈尼寺〉への言及があるのである。だからハムレットとしては、これは何よりも、連続的なイメージとしてみれば、明らかにオフィーリアへの愛のサインであったと断定できる。

だが、この場の後半の部分は、むしろ絶望的な気分で、彼がこの機会を利用して、カーテンのかげの三人にむかって発した挑戦状である。自分に向かって発していたサインを見逃した彼女にとって、このハムレ

トの言動はいっそう不可解なものにみえ、絶望的な断絶が印象づけられる。あまりにダン的なコンシートに満ちた言葉は、それにいささかなじんでいたオフィーリアにもわからない。父のポローニアスも、先のシーンでこのハムレット的な曖昧さにしてやられたのである。オフィーリアの立場から見ると、ハムレットはどのように映ったか。事態が容易でないほど、王子の状況は悪いと感じたに違いない。そこから、彼女の唯一の長せりふが導かれる。一部は自分の行動にも責任のある事柄によって、恋人をこのようななじめな状態にしてしまったという後悔の念があふれている。同時にそういう渦中であって、幸せと不幸との谷間のどん底におちた自分にたいする自己憐憫も垣間みせる。彼女の立場にたつて、これらの一連の行動をみえてくると、ハムレットとは、まったく異なった世界が描かれているのである。

この場面でのオフィーリアと、劇中劇の場面での彼女とは、また見違えるほどちがっているのは、なぜなのであろうか。この二つの場面との時間的な間隔は、そう長くはない。その間に、オフィーリアには、どういう気分の転換があったのか。尼寺の指摘は、彼女にとって、ずいぶんショックであったことは明らかであるのに、この劇のシーンの彼女は、見違えるばかりにいきいきとして、本来の姿を見せているようにみえる。王は尼寺の場の直後にハムレットの心は恋になど向いてはいない、とはっきりと結論を出している。自分の目で見て、ポローニアスの説を否定したのである。それにたいして、オフィーリアは別の結論に達したのではないか。ハムレットのいうことは支離滅裂なものであるが、そこには自分の存在が大きな場を占めていることを、乙女の直感でつかんだからこそ、気分が転換した。ハムレットは皮肉にも、ねらいどおりにいったことを、自覚しているとは思えない。結果として重層的に彼の発した信号が、それぞれの機能をはたしていたことを、彼は考えようとしていないのである。

だから劇中劇の場での彼は、ひたすら王妃にたいする当てつけの演技に神経を集中している。ねらいは王にあるはずであるのに、彼の考えたシナリオと演技は、もっぱら王妃のことであり、王がとりみだしたのは、満座で王の権威を否定されたからである。特に愛する王妃のことを、辱められたからである。これほどどぎついあてつけは、彼自身予想もしなかった。何か不都合なことが起きるという予感はある、あ

かじめハムレットに警告を発してはいた。しかし、これほどのことをするとは考えなかった。このような状況におけるハムレットとオフィーリアのやりとりは、実に対照的にならざるをえないのである。ハムレットの戯れ言は、これから起こることのカモフラージュにすぎない。しかしオフィーリアにとっては、自分の確信を満足させてくれる嬉しいことの連続に感じられる。それにたいしてハムレットは、むしろ迷惑そうに彼女を牽制しながら、相手をしているのである。そして彼女の心の変化を見ようもしない。上演の最初の部分でのハムレットとのつかの間の会話は、さりげないものだが、この劇におけるオフィーリアの心の動きと、ハムレットのそれにたいするある種の鈍感さとは、あざやかな対照を示している、

ハムレット きみの膝に横になつていようか。

オフィーリア こまります、そんな。

(3幕2場99—100行)

Hamlet Lady, shall I lie your lap?

Ophelia No my lord.

当時の貴族社会の芝居見物の流行にひっかけていったのだが、この“lie”はもちろん別の意味にもとれる。ハムレットはからかったのである。彼女は文字どおりの意味にとって、ことわった。いくらかのやりとりがあって、また、

ハムレット なんかいやらしい意味にとったな？

オフィーリア 知りません。

(103—4行)

Hamlet Do you think I mean country matters?

Ophelia I think nothing my lord.

といったたわいもない会話になる。すると、今度はハムレットが彼女の逃げ口上を逆手にとって、

ハムレット 女のまたぐらで寝るっていうのも悪くないな。

オフィーリア どういうことですか？

ハムレット どうってことない〈あれ〉のことさ。

(105—7行)

Hamlet That's a fair thought to lie between maid's legs.

Ophelia What is my lord?



Hamlet Nothing.

今度はハムレットが彼女の口癖をまねたのである。そして、彼女の“think”をきわどいことにねじまげている。“fair thought”——“lie”——“Nothing”はいずれも性交ないしは、女性性器を指すことばとして用いられている。これをみても、彼の意識が今のオフィーリアの心に向いているというより、王妃や王のこと、そのゆるしがたい陵辱の行為に奪われていることを示している。

この態度は劇が進むにつれていっそうひどくなる、

オフィーリア 殿下はまるでコーラス役みたいにごぞんじですね。

ハムレット おまえと恋人のよろしくやってるところを、人形のエロ芝居よろしく解説してやってもいいんだぞ。

オフィーリア ますますひどいことをおっしゃって。

ハムレット おれのものをだらんとさせたきゃ、一声うめいて、ご誕生ってこなきゃおさまらん。

オフィーリア のりにのってらっしゃるけど、ますますお口が悪くなる。

(222—7行)

Ophelia You are as good as a chorus my lord.

Hamlet I could interpret between you and your love if I could see the/puppet dallying.

Ophelia You are keen my kord, you are keen.

Hamlet It would cost you a groaning to take off mine edge.

Ophelia Still better and worse.

このやりとりは、二人の心の行方を見るとき、まことに興味深いのである。オフィーリアはこの多少きわどい話題をよろこんでいるようである。むしろハムレットが自分にたいして気をゆるしてくれているようにすら感じている。しかしハムレットの話題は、これから始まる芝居の核心を解説しているのである。最初からあったすれ違いが二人とも意識しないままに、決定的な距離を生み出している。最後の引用の文句は、英国国教会の祈禱書の結婚式文の有名な一句である。これを見ても、オフィーリアが心のうちで、結婚のことを無意識にいただいていることが、表現されていると見るべきである。それにたいして、ハムレットのせりふ

は、

そういう偽りの誓いで、女は夫をだまくらかすんだ。

(228行)

So you mistake your husbands. . . .

彼の心は母の方へと向いている。

劇中劇の騒ぎの最中のオフィーリアについては、何の手がかりもない。彼女のつかの間の幸福な瞬間と、未来への期待はそこはかたなく消え失せてしまったであろう。この落差は相当なものであったはずだ。しかしシェイクスピアはその主題を書こうとはしていない。恋愛説で王の満足を得られなかったポローニウスが、またまたスパイを演じることで今度は自らの命を失う瞬間を描いているだけである。わるふざけが度をすごしているとハムレットを非難するポローニウスが、スパイ行為の度を越す行為によって、身をほろぼすのは何と皮肉なことか。問題はこの父の非業の死によって、彼女がどのような深い悲しみを感じたか、それが愛するハムレットの理不尽な行為によって引き起こされたことを、どう受けとめたかなのだが、そのことに関しては、ハムレットが英国へ追放された後の狂気の場合まで演じられないのである。彼女が再登場するのは、4幕5場になってである。すでに狂気の状態であり、王妃すら会いたがっていない。

あの娘とは話しません。(4幕5場1行)

I will not speak with her.

何とすべてが変わってしまったのか。あれほど好意的にオフィーリアに接していたガートルードからこのような突き放した言葉がなぜ出てくるのか。

この王妃の言葉によって、情勢が変わり、事態が切迫していることをわれわれは知る。オフィーリアの狂気は単に一人の人間の不幸を表しているのではなく、このデンマークの全体の墮落を示している。ハムレットの不在の後を埋めて余りある役が彼女にわりあてられている。ここに表現されているのは、かつての受け身の、情勢が好転するまでじっと耐えている姿ではない。あらゆる束縛から解放されて、本来の闊達で、愛すべきオフィーリアの姿が表現されている。世間や宮廷の者たちは違った目で見るとであろう。しかし、シェイクスピアはその一方で、父や兄に代表される宮廷社会のおきてから解放されて、ひたすら自己の欲望や感

情や心のやさしさを見せてくれるのである。

どうしたらあなたの恋人だってわかるの、

間違いない目印は何？

(4幕5場22—3行)

How should I your true love know

From another one?

これは歌の文句である。聖地巡礼の人に恋人を慕って、その消息を尋ねている。すると巡礼はその人だという目印は何かと聞いているのが、この歌の主旨である。恋人はすでに亡くなっている。次には父のイメージらしいものが出てくる。これからはこの恋人と父らしいイメージが出てくるのである。なぜ父の場合「らしい」というかといえば、オフィーリアが父のことを思っていると想像しているからである。しかし彼女が父の死を深刻に思っていたことは疑いないが、はたしてこの父は娘の幸福のことを考えていたであろうか。彼女の狂気のたわごとが父のことだけというのも、疑問である。むしろこの一族がハムレットのために離散し、不幸のどん底へ落とされたことが、彼女の真の狂気の原因である。だから、

ふくろうはパン屋の娘だったそうよ。

(42行)

... They say the owl was baker's daughter

というのは、いろいろと言及されているが、自分のすっかり変わってしまった状態、しかも民間の伝承のあるように、不平を言ったけちな娘が、キリストによって、ふくろうの姿に変身させられてしまったことを強調しているのである。不平をいって、ふくろうにかえられてしまうようなことのないように、と素直にいつているのである。それはたちまち男女の愛の描写にうつってゆく。ヴァレンタインの日に、若者が愛をかわす、

イエスさま、マリアさまにかけていますわ、

なんと、なんと恥ずかしい、

若い殿方のやることって、同じね——

ほんとに、悪いひと。

娘がいうことによ、「転がす前にいったじゃない、

誓って結婚するからさ」って。

すると何ておっしゃった——

お天道さまにかけていうけどね、そりゃ、  
転がすまでの方便さ。

(58—66行)

By Gis and by Saint Charity,  
Alack and fie for shame,  
Young men will do't if they come to't-  
By Cock, they are to blame.  
Quoth she, 'Before you tumbled me,  
You promised me to wed.'

He answers-

So would I ha' done, by yonder sun,  
And thou hadst not come to my bed.

狂った彼女のこのとりとめもない言葉は、最後の、  
何もかもよくなってよ。我慢が肝心。でも、  
泣けて泣けてしょうがない。つべたい地べたに  
埋められてるの。お兄さまにお知らせしなくちゃ…

(68—70行)

I hope all will be well. We mut be patient, but I cannot  
choose but weep to think they would lay him i'th' cold ground. My  
brother shall know of it, . . .

この「彼」とはどうも父と考えたほうが自然であるが、彼女の心のなかでは、ハムレットと父とが混同している。しかし文脈からすれば、兄の忠告のことが浮かんでくるのだから、父の連想が強く印象づけられる。レイアーティーズの言った通りになってしまった。ハムレットは彼女のことなど考えもせず、イングランドへ行ってしまった。置きみやげに父を殺害していった。これは「転がす」こと以上の深い罪なのである。ハムレットが不在のときに、このようなオフィーリアの悲劇を示すことが、シェイクスピアのねらいなのである。ハムレットはけっしてこのような彼女の深い悲しみと、絶望を見てはいない。海賊船のハムレットは何を考えていたであろうか。

最後にオフィーリアの花の場がくる。とりとめもない歌の合間にわたされる花と、その意味、そしてレイアーティーズとの最後の別れが演じ

られる。ここにも、かつて兄の言った忠告の真の意味があると同時に、彼女自身の失ったものへの衝撃が狂気の形をとって示されているのである、

あのひとは二度ともどらない？

いえ、いえ、この世のひとでない、

あなたもさあ死の床へ、

二度ともどらぬひとだもの。

(186—9行)

And will a not come again?

No, no, he is dead,

Go to thy death—bed,

He never will come again.

これはもちろんハムレットと自分とをイメージしているらしいが、そのすぐ後には白髪の父らしいイメージが出てくる。たえず父とレイアーテーズとハムレットのイメージがだぶっている。しかし彼女の心のなかには、ハムレットにたいする変わらぬ愛があり、それが狂気のなかで素直に発信されていることを見逃せない。ハムレットは、このようなオフィーリアを想像していたであろうか。その材料ははなはだ乏しい。彼の心は母のことで、復讐できない悩みとで充滿していて、もはやオフィーリアへの愛をロミオやオセロウのようにではなく、ましてやアントニーのようにでもないものでしか表現していない。もし、最後のオフィーリアの墓場の場で、彼が心乱れて、

ガートルード ハムレット、この件とは何のことです？

ハムレット オフィーリアを愛してたんだ。兄とやらがごまんと  
いたって、

そいつらがいかにどの愛をそそごうと、

このぼくにゃ及ばないぞ。このひとをどうしようっ  
ていうんだ。

(5幕1場235—7行)

Gertrude O my son, what theme?

Hamlet I loved Ophelia; forty thousand brothers

Could not with all their quantity of love

Make up my sum. What wilt thou do for her?

という場がなければ、彼のオフィーリアにたいする気持ちは、何の印象もあたえないままに、劇は終了してしまったであろう。このせりふだとて、なにやら芝居くささがのこるものである。特に、彼がレイアーティーズの臭みをかぎとったにしても、それで彼をせめられるのか。むしろ、これはマイナスであって、王ですら、この直後で「こいつは狂ってるんだ、レイアーティーズ」と発言している。この時点で彼はハムレットの力量をむしろおそれるどころか、侮っているようにすらみえる。これほど王がハムレットの人物に関して断定的に発言したことは少ない。「恋などに向いていない」と断定したことくらいか。

オフィーリアは死んで、むくわれない形でほうむられながら、また最後の場面でも、恋人から真実の表現を受けられなかった。ハムレットがオフィーリアにたいして、愛のかたちをもっとちがったやりかたで表現することはもちろんできたはずだ。しかし彼はそれをするような内容をもっていなかったのではないか。彼の愛が疑わしいとは思えないが、それにしても、彼の心はあまりにも、ガートルードの行為に向けられすぎ、心を汚すまでそこにこだわっていつてしまった。そのために、オフィーリアの無邪気な、汚れない心、彼女の忍耐強い特質、彼を理解しようとする意欲、父との板挟みになりながらも、希望をもって待つという美德などが、彼にさほどの印象を与えず終わっているのである。これがオフィーリアの真の悲劇である。両方共にそれぞれの仕方で愛していた。しかしそういう愛ならシェイクスピアの他の作品にも多く描かれている。しかしハムレットのような愛し方は、異質であり、そして何よりも彼はオフィーリアのもっている美質を理解しようとはしていない。男の美を求め、それを最大の価値として認めたいのである。だから、ホレイショウにたいする過度の敬意とオフィーリアにたいする自虐的なまでの侮りとが、あざやかに観客に感じられる結果になるのである。

ハムレットのこのような愛に接しても、オフィーリアは独自の生き方を変えてはいない。それは数々の喜劇作品における女性のあり方とまったく同じである。はたしてハムレットはそれに気づいていたであろうか。気づいたとしても、それを女性の共通の醜い特色としか見なかった。彼にはオフィーリアの愛を受け入れるだけの余裕がなかったのである。それだけではなく、女性の特有の愛のあり方も認める余裕をもたなかった。そのことは母である王妃にたいする態度にはっきりと示されて

いる。実は王妃も彼女独特の生き方をしている。それをブラッドリー風  
に言えば、鈍感で、あつかましく、ただ盲目的に息子を愛する母という  
ことになる<sup>8)</sup>。ハムレットはそのことを、彼女の欲望がそうさせたのだ  
と見ている。そして一方的にそういう見方に固執してゆく。母がクロー  
ディアスに陵辱されたといっているのは、彼と、彼の死を報告するとき  
のホレイシヨウのみである。亡霊のハムレット王の場合、不思議なこと  
にその裁きを天にまかせるがいいといっている。亡霊はけっして妻を責  
めようとしていない。だから〈彼〉は最後に王妃の居室に現れるとき、  
再び彼女と会うチャンスがきたのに、それを無視して、彼女に姿を見せ  
ず、ハムレットのみに正体を現す。もし彼に前の妻である王妃を非難す  
る意志があるなら、ここで妻にたいして恨み言をいったであろう。彼は  
そうすることはなかった。それはこの場のみでなく、最初からそのつも  
りもなかったようだ。ハムレットにはその意味を考える余裕がない。ま  
たすでに指摘したように、そこにみられる真の意味を考えようともして  
いない。このような状況では、ガートルードの生き方を見据える余裕が  
あるはずもないのである。ハムレットの眼鏡を通して見れば、ガートル  
ードは厚かましい爛熟期の女にすぎず、愚かにも夫の弟の欲望を受け入  
れ、目がくらみ、あの『リチャード三世』のアンのように、行く末の心  
細さのあまり、身をまかせてしまうのと同じ弱い女性ということになる<sup>9)</sup>。  
こういう女性をハムレットは許そうとしない。しかし、はたして  
ガートルードはそのような女性として描かれているであろうか。このこ  
とに関してはほとんど考察の対象になっていなかった。もしハムレット  
の独断的な判断から解放されて、彼女を見るならば、そこにシェイクス  
ピアは実に興味深い女性像を描いていることに気づく。それは喜劇作品で  
彼がさまざまな女性像を創造するときと同じ態度が見られるのである。  
シェイクスピアの作品には、母が登場することがまれであるが、その中  
にあって、本格的な母を描いている作品なのである。シェイクスピアが  
母を登場させるときは、それは特殊な意味がこめられている。「ハムレ  
ット」では、その母の存在が、ハムレットの意識や独断の陰でかすみ、  
せりふの少なさもあって、軽く見られてきた。

ガートルードの再婚の問題については、すでに論じたが、ハムレット  
は終始一貫して彼女の再婚は無効であり、不倫であるとしている。その  
根拠はハムレット自身の口からふれられていないが、明らかにカトリッ

ク教の教会法、あるいは英国国教会の教会法にもとづいている。それは1603年の教会法などをみれば明らかである。しかしシェイクスピアは、そのときどきで、あるときはカトリック的な見方をとり、あるときはプロテスタント的な見方を導入している。だからここでハムレットが2カ月という時間にこだわっているのも、彼が法的な根拠を示しているにもかかわらず、それはシェイクスピアが単にハムレットのカトリック的なものの考えにここは固執しているのだと印象づけようとしているにすぎない<sup>10)</sup>。シェイクスピアがここで王妃を法的に断罪するつもりで、ハムレットのせりふを用いているとは思えない。また、この作品でシェイクスピアは、デンマークの宮廷の登場人物のうち、王妃の結婚に反対している者を一人も描いていない。不満のつぶやきをもらす者をも描いてはいないことは重要だ。このような政治的な判断を必要とする問題を描くときのシェイクスピアは、たいてい対立的な意見をもつ人物群を登場させるのが普通である<sup>11)</sup>。この作品では、だからこのことはハムレット一人の問題として描かれていることになる。

ガートルードはハムレットの立場に心をいためている。しかし彼の無言のいやがらせや、抗議にたいしてはそれほど影響されてはいない。この点に彼女の性格や、隠された決意や、生き方が示されている。もともと彼女は客観的な人である。ハムレットが客観性と情緒過多という矛盾した二面性に揺れているのに反して、彼女は一貫して冷静であり、見たもの以外は認めない。ある意味では、政治的でもある。オフィーリアは待ちの姿勢につらぬかれているが、ガートルードは状況からも、地位からもそういう態度を許されてはいない。彼女の行動を見ると、客観的な情勢判断をくだして、積極的にデンマークの王国の経営に加わっているようにみえる。オフィーリアと同じように多くを語りはしないが、彼女の行動はその意図をはっきりと示している。クローディアスとの結婚、その代償としてのハムレットの王位継承者としての指名の獲得、国民の意見の集約などがガートルードの決断の結果である。その間にハムレットはいったい何をしていたのであろうか。そのことを何もシェイクスピアは語ろうとしない。もしハムレットが王位を嗣ぎたかったのであれば、それなりの行動にでたはずだ。王の後に言ったことが真実なら、ハムレットは国民に人気があり、誰も彼の王位継承に異論をはさまなかったはずだ。ガートルードはしかしその道を選択していない。このことが



ハムレットとの衝突の原因である。その最初の場面が有名な謁見の場になる。前王の死にこだわり、黒衣で通しているハムレット、これは全員にいやがらせとしか映らないが、そのことを母が、

何でおまえだけそうこれみよがしにみえるの？

(1幕2場76行)

Why seems it so particular with thee?

というと、ハムレットは猛烈に反発する。ここに実はガートルードの特徴がよく出ている。彼女はこれ以後もそうなのだが、客観的な観察を口に出したにすぎないのである。それをハムレットがねじまげて強引に自分の不満の世界へと引き込もうとしている。これは彼が決定的に過去にこだわっているからである。母の王妃の現在形とハムレットの過去形との激しい対立がある。ガートルードには現在しかない。ハムレットの過去は現実の政治状況には存在しないのである。だから「みえる」という言葉は痛烈なハムレット批判に聞こえてしまう。母にはもちろんそんな意図はなかった。ただ現実的でないことを指摘して、たしなめただけなのである。それは宮廷人のすべてを代弁している。彼が過去にこだわっているとしても、理解を得られるものではない。黒い衣装はこれみよがしにしか見えないだろう。ハムレットの過去への執着は彼を孤立させてゆく。それだけでなく、彼自身をも身動きできない状況へと追い込んでしまうのである。このときに、ハムレットははたして母のこういう現実主義を理解していたであらうか。彼にとって、過去の母の像しか見えない。だから彼は激しく母の変心をなじるのである。すべての人はこれを大人げない態度であり、王として心許ない人物ととったのではないか。だからポローニアスはハムレットを終始子ども扱いするのである。この場面で、ハムレットが母の立場や意図を考えたふしが見られない。ただ彼女が過去の生活をまもり、そこへ回帰すべきだと考えているだけなのである。彼女の行動に疑問が生じてくるのは、亡霊の出現を待たなければならぬ。ハムレットが予見をもっていたにしても、それは現実のものではなく、亡霊が出現する以前と以後とを区別しないと、ハムレットのガートルードにたいする正当な評価を誤るであろう。混同は事態を複雑にする。この二人の母子の生き方の相違から、劇は始まっている。デマークでの生き方の対立でもある。

もう一つ忘れてはならないのは、母が自らの性的な欲望を別に隠そう

とはしないで、むしろ自信を持って、対処していることである。これは今後ハムレットからその点についてさまざまな嫌みをいわれるが、少しも動ずることはない。これもハムレットにとっては許せないものとうつる。しかしこの作品においては母には母なりの生き方があることを暗示している。それをシェイクスピアはハムレットの意識とは独立したものとして描いているのである。ハムレットは彼女の居室で、いままでの母が如何に醜く、薄汚い欲望にふけているか、デンマークの血を汚したかを、口汚くののしっても、彼女はそれを正面から受けとめようとはしない。その点を次のやりとりによって見ることができる、

ガートルード …ああ、ハムレット、もうそれ以上いわないで。  
この目を心のほうに向けさせてくれました。  
わたしにはどす黒く染み着いたものが見える  
その色はもう消えますまい。

ハムレット …いや、それどころじゃないぞ、  
あぶらぎった寝床で、汗みどろの悪臭をはなち、  
娼婦の汚濁にどっぷりと、嬌声をあげ、いちやついてんだ。  
薄汚いぶた小屋でな。

ガートルード …もうやめて。  
おまえの言葉は剣のように耳にささる。  
もう言わないで、ハムレット。  
(3幕4場88—94行)

Gertrude O Hamlet, speak no more.  
Thou turn'st my eyes into my very soul,  
And there I see such black and grained spots  
As will not leave their tinct.

Hamlet Nay, but to live  
In the rank sweat of an enseamed bed,  
Stewed in corruption, honeying and making love  
Over the nasty sty.

Gertrude Oh speak to me no more.  
These words like daggers enter in my ears.  
No more sweet Hamlet.

これはごく自然に聞けば、ガートルードの良心が目覚めて、自らの罪を意識したと受け取れるであろう。しかし、そうすると矛盾がたちまちのうちに現れてくる。彼女はその後ハムレットのいうとおりにしたであろうか。そのようなふしは見られない。そうだとすると非常にここは不誠実な言葉ということになる。ガートルードはこのように息子の言葉に合わせながらハムレットをなだめているようにも見える。ハムレットの口汚い言葉は、いまだ王妃としてのガートルードに浴びせられたことのないものであったろう。彼女はショックを感じたであろう。誰でも感じるように、ここは当時のイースト・チープあたりの娼婦の、薄汚い淫売宿のイメージがある。「心を汚すなよ」といままめた亡霊の言葉はここで真実となって、ハムレットは母にたいして陵辱するような気分にはたっている。母への尊敬がないことはもちろん、過った行為をたしなめるときの心配りもない。女性に失望したときのシェイクスピアの主人公の中には、女性を娼婦のイメージで決めつける傾向がある。オフィーリアにたいしても、あの尼寺の場で同じようなことがおきた。母の言葉はハムレットの耳にはとどかない。(引用の直前の部分でも、ハムレットは彼女のたびたびの問いかけを無視して、少しも答えようとせず、一方的にまくしたてている。)このようなハムレットの態度を、母らしく受けとめているとみられるのである。彼女の態度には、妙に自信のあるところが見受けられる。この場は見かけの言葉にだまされる。むしろガートルードの余裕が印象的なのである。

王妃が理解したのは何だったのであろうか。彼女は自分の欲望の生活が、息子にどのような衝撃を与えていたかを理解したのである。しかし、そうであるからといって王との関係を絶てるほど事態は甘くはない。それにそのことは王とガートルードとの問題でもあるのだ。ハムレットの出る幕ではない。現在のハムレットの姿は、宮廷の信頼をかちえることのできるようなものではない。王妃の悩みは大きいのである、

ああ、ハムレット、わたしの心を真つ二つにしてくださいね。

(3幕4場157行)

Oh Hamlet, thou hast cleft my heart in twain.

という母の言葉にも、またまた彼の冗談癖が首をもたげる。一方を捨て、もう一つの方で生きればいいんだと、彼は断定的にいう。彼は自分勝手であることに気づいていない。彼の独白は、〈To be or not to be〉

の二者択一を抱え込んでいたはずである。自分が解決できないことを、母にたいしては簡単に言える。女性の苦しみを理解しようとしていないのが、一つの特徴である。母の言いたい意味がわかっただけにはこんな冗談をいっている場合でないことがわかったであろう。彼は母の欲望を見つめ、それを嫌悪していることだけに当面母の注意を引きつけようと熱中している。それは亡霊である亡き父の誇りをも傷つける。だからハムレットだけに亡霊は現れ、最後の忠告をあたえるのである。ハムレットに父ハムレット王の代理はできない。

これらハムレットのイメージにはっきりと示されているのは、彼の女性にたいする態度である。そもそも女性を「弱者」ときめつけたその根底には、ハムレット独特の女性観がひそんでいる。彼がイングランドへ追放されるまでの間、オフィーリアではないが、「ますますひどくなる」のは、彼のもっとも大切な二人の女性を、娼婦のように扱ってゆく態度である。これは結果的ではあるが、二人を死へと追い込んでゆく。すると、彼の女性にたいするそのような偽悪的な態度は、消えてしまうのである。しかしあのオフィーリアの埋葬の場にしても、母の王妃の非業の死の場にしても、彼の態度は何か女性にたいする根本的な弱点をさらけ出しているように思われる。愛が深くありながら、なお性的な墮落のイメージを脱することのできない悩みがつきまとう。オセロウはデズデモナのアを信じられなくなったとき、彼女を娼婦のイメージでしか表現できなくなる。ハムレットも自分の優柔不断の悩みと復讐の行動への過程で、二人の女性を娼婦のように扱っている。このような態度を女性たちは理解できただろうか。ガートルードは観察力と、客観的な表現力とをそなえた人であるが、理解できなかった。オフィーリアの想像力もそこまでは及ばない。ハムレットの不合理な辱めを二人の女性は愛と寛容で耐えるのである。この二人の女性は、理解の及ばないことにたいして、しかもそれがハムレットに関しては、非常に謙虚である。それをハムレットは考えようとしていない。むしろ鈍感な女ととらえている。二人の女性とハムレットとの奇妙な愛の行動の顛末は、ハムレットの直面している復讐の行動とかみあわず、それでいて互いは影響を及ぼしている。そもそもハムレットが狂気の芝居をやると決意したときから、復讐の動機は彼から〈隠された〉のである。それをクロードィアス王や、ポローニウスたちが、探ろうとすることによって復讐の行動が動

き出す。しかし女性たちとの行動は、それと何の関係もない。それはハムレットの心の中で (in my mind's eye) で重要な関連を保ち続けるのである。だからそれは女性たちにとって理解の及ばない世界である。そうして見てくると、この作品は二重の悲劇的な構造をもっていることがわかる。ハムレットの死の場面では、女性の問題は跡形もなく消え失せている。いずれにしても、ハムレットは最後の場面で、母と恋人のことを何も語ろうとはしなかった。

居室での悲劇的な結末以後、ガートルードはどのような生き方を選択したか。彼女はハムレットに約束したとおり、真相を王に告げたりはしていない。また真相を知っているようなふりもみせない。王にたいする態度を変えたであろうか。何の変化も見られない。ただわずかな変化が認められる。オフィーリアの狂気に接したとき、最初彼女はオフィーリアに会いたくないという。何か不吉な兆候を感じとったのである。それが呼び水でもあったかのように、突如、レイアーティーズが王宮に侵攻してくる。このときの王妃はむしろ毅然として、王を庇うような行動をとる。これは明らかにハムレットと彼女との違う一面を示している。次第に彼女の思惑を越えた情勢が見えてくる。王はハムレットの手紙が来て、彼が命をながらえたと知ると、いきなりガートルードを退室させる。このようなことはかつてなかった。観察力に優れた彼女が、この変化を見逃すとは思われない。レイアーティーズがハムレットを処罰しないことを責めるとき、王はその理由を三つあげている。王妃がハムレットを深く愛していること。王自身がガートルードを深く愛していること。民がハムレットを愛していること。このうち、前二者は納得できるものである。しかし国民がハムレットを愛していたかどうかは、他に材料が与えられていない。もし、王のいうようであるなら、ハムレットが復讐することは、レイアーティーズ以上に容易であったろう。またハムレットは狂気である。このうわさはハムレットにとって、致命傷であったはずだ。狂人のいうことを聞くほど国民はお人好しではない。ポローニウスとオフィーリアの死と狂気。それはハムレットと深く関係していることが知れわたってしまった。それらを考慮すると、王の理由には嘘と真実とが混じっている。彼は身を守ることに必死である。だから王妃を退室させたのは大きな意味をもっていたはずである。どの程度ガートルードはそれを感じたのか。はっきりと表現されていない。

前後の関係を見ると、その後の王妃はオフィーリアのところにいたことになる。狂ったオフィーリアの最期をみとったのは、王妃だった。彼女の言葉は記録係のように簡潔で、正確な描写である。しかし十数行にわたる彼女の描写は、ちょっと異質なものになっている。めずらしく詩的なのである。だからケンブリッジ版のエドワーズのような注釈者によっては、これは当時の歌の文句のようなものをたまたまガートルードが役として受け持っているのだと主張する。おそらくそのとおりであろうが、もう一つ、もし王妃がここで客観的なオフィーリアの死の描写などをやれば、レイアーティーズを刺激したであろうから、何としてもそれをさけたかったのが、彼女の通常スタイルではない理由になるだろう。さらにガートルードはオフィーリアの埋葬の場で、ハムレットの花嫁になってほしかったという、

ハムレットの花嫁になってくれたらよかったのに。

その新床を花で飾りたかったのに、愛らしいオフィーリア、  
こうして死の床にまくことになろうとは。

(5幕1場211—13行)

I hoped thou shouldst have been my Hamlet's wife.

I thought thy bride-bed to have decked, sweet maid,

And not t'have strewed thy grave.

このせりふの次のレイアーティーズの怒りのせりふを見れば、彼女が本心からこのせりふを言ったにしても、それだけではなく、彼女が政治的な配慮をしてハムレットへの憎しみの緩和をはかったと見てよいであろう。しかしその配慮も無駄だった。それほど事態は切迫していた。もうどうしようもないところへきていた。そこで母の配慮をふみにじるように、ハムレットがレイアーティーズとぬきさしならない争いを引き起こすのである。その絶望的な思いと戦いながら、

…この子は狂っています。

こうして少しの間発作が続くと、

あっという間に、あの雌鳩が金色の雛を辛抱強く

抱いているときのように、静まってしまいます。

ただだらんとして、だんまりをきめこんでしまいます。

(251—55行)

... This is mere madness,

And thus awhile the fit will work on him;  
Anon, as patient as the female dove  
When that her golden couplets are disclosed,  
His silence will sit drooping.

彼女にとって、ハムレットはやはり狂ったとしか思えなかったのか。ハムレットがやがてデンマークの王になって、治めるのを見るまでは、死ぬこともできない。このような母としての悲願が見えてくる。しかし、ハムレットはこのような母の思惑を考えたこともないのである。何のコメントもしていない。

ついに最後の王妃の場面がくる。彼女はこの作品のなかで、たった一度だけ、クローディアスの命令を聞かないときがある。この場面で真珠入りの杯を王妃はハムレットのために飲み干そうとする。王は強い調子で、

ガートルード、飲んでではならん！

(5幕1場268行)

Gertrude, do not drink!

という。しかし、

乾杯させてください。おゆるしを。

(269行)

I will my lord, I pray you pardon me.

と、断固としていう。何も知らずに彼女は飲み干したのか。それとも、何かを試そうとして、命をかけたのか。解釈が分かれるところである。彼女はハムレットとの悲劇的な場面以来、何も変化が見られないということを描いたのであるが、彼女の場面からは非常に現実的な、観察力と冷静さをもった人物であることがわかっている。おそらく、ハムレットにいわれたからといって、すぐに王にたいして態度を変化させたりはしなかった。しかし、息子のイングランドへの追放、ふいの帰国、レイアーティーズの反乱、彼と王との密談、突然の試合の申し出、真珠の入った杯などは、彼女の観察力を刺激したと思われる。彼女はハムレットのこのような行動には出なかった。それは実に賢明な態度である。彼女はハムレットの怒りに接したとき、息子の愛の深さと、事態の深刻さを認め、動揺した。そのような事態に直面して動揺しない者があろうか。それでも、ハムレットの期待に反して彼女は表面上後悔したようなそぶ

りを見せてはいない。あえていえば、ハムレットをかばう行動が以前よりははっきりと見えているくらいであろうか。クローディアスの王妃として、威厳をもって行動している。彼女の心の中を表現する言葉は少ないので、どのような変化があったかをはっきりとは示すことができないが、冷静な対応をしていることは明らかである。そこがハムレットとは対照的なのである。時として感情を抑えられないというハムレットにたいして、如何に衝撃的なことがあっても、本心を表に出そうとはせず、慎重に対応している。その王妃が、王にそむいた行為は、この真剣な試合で、ともすれば注意をそちらのほうへそらされてしまうのであるが、重要な意味をもっている。彼女はこの行為によって、内面の変化をはっきりと見せている。ガートルードなりの決断があったのである。王の行動の帰結は、この杯の中にあるのではないかという結論である。もし何事もなかったなら、ハムレットの告白はやはり狂人のたわごとかもしれない。あのハムレットが劇中劇によってためしたように、彼女は杯を飲み干すことによって、命をかけて王をためしたとみられる。

ハムレットはもちろんこのような王妃や、狂って自らの命を絶ったオフィーリアのことは頭にない。シェイクスピアはハムレットの苦悩、独白、印象的な言葉の連続、意表をつく行動の発想などを感動的に描いた。しかし、その彼の個性的な、そしてあるときは曖昧な、またあるときは道化的な行動のかけで、目立たなくても、ハムレットとは別の世界の行動や感情をまた驚くほど創造的に描いているのである。ガートルードやオフィーリアという女性によって表現されているものがそれである。ハムレットの特有の女性観が、この作品に暗い、忘れられない印象を与えている。ハムレットの悲劇的な行動と、女性たちのいわば喜劇的な行動への指向が、この作品では真向から対立する。それがこの作品の構成にある種の乱れを生じさせている。劇中劇までの女性たちの結婚観と、ハムレットの否定的な行動とは、ときに示す彼の道化的な行為との間にあって、いっそうこの劇の複雑さを、曖昧さをきわだたせる。『ハムレット』という悲劇作品のもつ位置は、このような男女間の構成上の断層の存在を見ることなくしては、明らかにならないだろう。



## 注

- 1) 「ハムレットにおける王妃の再婚」『成城大学文芸学部創立四十周年記念論文集』（成城大学文芸学部、1994年）参照。
- 2) 本論の使用テキストは、特に指摘のない限り、

Philip Edwards, ed., *Hamlet, Prince of Denmark* (Cambridge: Cambridge U. P., 1985) を使用した。それ以外には、

J. D. Wilson, ed., *The Tragedy of Hamlet: Prince of Denmark* (Cambridge: Cambridge U. P., 1957)

Harold Jenkins, ed., *Hamlet* (London: Methuen, 1982) を使用した。

なお、本文の引用の訳はすべて北川の訳である。
- 3) ブラッドリーの有名な悲劇論は、ごく最近までの男性中心の見方、ないしは悲劇中心の見方の典型を示している。「王妃は悪い女ではなかった。殺人を何とも思わぬような女ではけっしてなかった。しかし、彼女はおだやかながら野生的な女で、非常に鈍感で又浅はかであった。」（『シェイクスピアの悲劇』上巻、中西信太郎訳、岩波文庫、1938年、215ページ）とか、「すでに母の脆さに傷心していた彼は、今運命が彼に背を向けた瞬間にかつては彼の愛を迎えた人も亦、彼にそむくようになったことを見るのである。」[同書、199ページ]などは、その一例である。
- 4) もちろん、ここにシェイクスピアが原典のストーリーを意識して、それを前提に書いたと見ることもできるが、こういう肝心の点に関してシェイクスピアはつねに曖昧である。劇的には、ポローニウスが前王の死去にさいして、クローディアスの王位継承に尽力したかどうかははっきりしないのに、そういうことを周知の事実としてこの劇を発展させているのか、あるいは、それはそれとして、ハムレットの側がポローニアスの個人的な性癖や、生き方を嫌っていることを示しているのか、それが曖昧なほうが面白いとも思えるのである。いずれにしても、ハムレットのポローニアスにたいする態度は、非人間的な面が感じられる。同時に、ハムレットとポローニアスには、奇妙な同質性が感じられるのである。
- 5) このようなウィットにとんだやりとりは、喜劇の女主人公には普通のものである。だからここでも、オフィーリアの一面が明らかになるだろう。後の深刻な状況での彼女がむしろ特殊なのであって、いつもはこのようにいきいきとした、シェイクスピアの喜劇の女主人公と共通した女性であったことをうかがわせる。これを見逃してはならない。
- 6) 注3)を参照。
- 7) 前掲書「ハムレットにおける王妃の再婚」、7-11ページ参照。ヴァレ

ンタインの場合は、スピードによって謎解きをしてもらえたが、オフィーリアにはそのような者はいない。悲劇と喜劇との手法のわかれ目である。

8) 注3)を参照。

9) このくだりはほぼ原典にそっている。ペルフォレなどとの関連については、

William F. Hansen, *Saxo Grammaticus and the Life of Hamlet* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1983) を参照。リチャードが女性の弱さに言及するとき、ハムレットに近いものを感じる。

10) このことは、観客の階層によっても理解度が異なっているといえるだろう。貴族階級はこのハムレットの見方をよく理解したであろうし、下層階級ではそれほどでもなかったであろう。

11) 『コリオレーナス』の冒頭の間や、『リチャード3世』の冒頭のリチャードのせりふや、2幕3場の市民の声などはその典型である。

#### 参考文献

注で記述したもの以外のものをあげておく。

Kate Aughterson, *Renaissance Woman: A Sourcebook, Constructions of Feminity in England* (London: Routledge, 1995)

William and Malleville Haller, "The Puritan Art of Love" in *Huntington Library Quarterly*, V (1942), 235-272

Robert Hapgood, *Shakespeare the Theatre-Poet* (Oxford: Clarendon Press, 1988)

Martin Ingram, *Church Courts, Sex and Marriage in England 1570-1640* (Cambridge: Cambridge U. P., 1987)

Lisa Jardine, *Reading Shakespeare Historically* (London: Routledge, 1996)

Alan Macfarlane, *Marriage and Love in England 1300-1840* (Oxford: Basil Blackwell, 1986)

Barnable Rich, *Fawltes Fawltes, And nothing else but Fawltes* (London: Jeffrey Chorleton, 1606) British Library No. G. 5529

Daniel Rogers, *Matrimoniall Honovr* (London: Harper, 1642) British Lib. No. 8416 bbb 34

Mary Beth Rose, *The Expense of Spirit: Love and Sexuality in English Renaissance Drama* (Ithaca: Cornell U. P., 1988)

Jacqueline Rose, 'Sexuality in the reading of Shakespeare: *Hamlet* and *Measure for Measure*' in *Alternative Shakespeares* ed., John Drakis (London: Routledge,

1985)

Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1550-1800* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1977)

———, *Road to Divorce: England 1530-1987* (Oxford: Oxford U. P., 1990)

Yoshiko Ueno, ed., *Hamlet and Japan* (New York: AMS Press, 1995)

J. D. Wilson, *What Happens in Hamlet* (Cambridge: Cambridge U. P., 1962)

Susanne L. Wofford, ed., *William Shakespeare: Hamlet* (Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1994)

Linda Woodbridge, *Woman and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womanhood, 1540-1620* (Brighton: The Harvester Press, 1984)

北川重男「亡霊は消えたか」『渦』第5号（渦の会，1988）

マーティン・スコフィールド著『ハムレットの亡霊—「ハムレット」と現代文学—』（岡三郎・北川重男共訳，国文社，1983）